

# シオン通信

大宮シオン・ルーテル教会 礼拝説教集

2007 年 2 月 第 8 号

日本ルーテル教団

大宮シオン・ルーテル教会

〒331-0814

さいたま市北区東大成町 1-229

phone/fax : 048-663-0215

URL <http://omiya.church.jp>

Email [omiya@church.jp](mailto:omiya@church.jp)

## 寒さ、乗り越えていますか

大宮シオン・ルーテル教会

梁 熙 梅(やん・ひめ)

いつもより今年の冬は暖かい日が続いて、「これで大丈夫かな？」と、むしろ心配になるこの頃ですが、皆さん、元気で冬を越していることと思います。天候が暖かいために今年は桜の開花時期が早くなると聞いていますが、桜の開花を楽しみにこの冬をもう少し乗り越えましょう。

わたしたちの教会は、今年から招聘教会へ向けて初めの一步を踏み出すことを話し合い、実際、具体的な計画の下で準備が進められています。わたしたちの教会の目標の上に神さまの豊かな働きかけがありますことを信じています。皆さんもわたしたちの教会のためにお祈りください。教会の自立のことが頭の中にあるこの頃ですが、今朝、我家の猫がわたしを力づけるためにハプニングを起こしてくれました。

わたしが洗濯場から少しばかり離れている間、今まで探検したことのないお風呂場に入り、洗濯に使って残った昨夕の湯船の中に入った(落ちた？溺れた？)ようです。湯船からどうやって這い上がって出てきたのかわかりませんが、家中に水を垂らしながらわたしのいる二階に上がってきました。ベットの上に座っては体のあっちこっちをなめながら自分で何とか乾かそうとしている様子を見てタオルで拭いてあげると、いつもなら嫌がる彼女も、さすが拭かれるまま身を任していました。犬と異なって猫は水で体を洗ったりはしない動物だと聞いていたので、大宮に来てから体を洗ったりはしなかったのですが、それに、拾われた際に北海道で無理やりに汚い体を洗わされたためか水が嫌いで、怖くて、水の前ではさっと逃げていたのに、今回は溺れてしまったという訳です。

生き物は、今までない、むしろ自分が嫌がっていたものと接し、それを通して失敗を繰り返す中で成長していくものだと思えて考えさせられたときでした。いいえ、避けていたものとの思いもかけない出会いは、むしろ生きる力、挑戦する力を育てくれるものかもしれません。人間も動物も、そして教会も、このような出会いのチャンスを逃さず、掴むものでありたいと思ったときでした。

彼女(猫)にとってこの出来事は一つの壁を乗り越えた、未来の新たな体験につながる出来事だったでしょう。これからどのようなハプニングに出会わされるのか楽しみにしています。同時に、家の隅々まで探検して好奇心を育てないで欲しい…といった、物を大切に思う心も働いている、複雑な思いでいます^^；

顕現主日 2007年1月7日

## 聖書のみことば

### マタイによる福音書2章1－12節

イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。『ユダの地、ベツレヘムよ、お前はユダの指導者たちの中で決していちばん小さいものではない。お前から指導者が現れ、わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』」そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通して自分たちの国へ帰って行った。

## 説教

### 『主に導かれる歩みへ』

今日は、異邦人にも、すなわちわたしたちにも救い主がお生まれになったことが星によって知らされたことを覚えて記念する顕現主日です。本当は、昨日、1月6日が顕現日ですが、顕現日に近い主日を顕現主日として守っています。そして、私たちの教会は西方の教会の流れに従って12月25日をクリスマスとして祝っていますが、御茶ノ水のニコライ堂や函館のハリストス正教会などギリシャ正教・ロシア正教などの東方の教会では1月6日がクリスマスとして守られています。ですから、

クリスマスはまだ終わっていない、今日までがクリスマスなのです。

さて、東の国で星の観測の仕事をしてきた占星術の学者たち、つまり、博士たちに救い主がお生まれになったことが知らされました。新共同訳では占星術の学者と訳されていて、これが正しい訳ですが、「博士」という言葉に私たちはなれていると思いますので、説教の中では博士と呼ぶことにします。博士たちは早速救い主に会いに行くための旅を始めます。そして、イスラエル

の一番大きい都市のエルサレムへ行き、一番大きな建物である宮殿に入って、ヘロデ王に聞きます。

「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」

このことを聞かれたヘロデ王は不安を抱いたと聖書は記しています。そして、エルサレムの住民も同様であった。「ユダヤの王」として救い主がお生まれになったということにヘロデ王とエルサレムの人たちは不安を抱いてしまった…権力を誇り、富を誇る一つの国の王さまでありながら、そして、物質豊かさの中の大都会の中に暮らすエルサレムの人々の不安はどこから訪れたものでしょうか。そして、私たちにはこれと似た不安はないだろうか。ともに考えるときをもちたいと思います。

さて、今日ヘロデの宮殿を訪れている博士たちは、それからイスラエルのもっとも小さき町ベツレヘムへ出かけ、生まれたイエスさまに持ってきた奉げものを捧げ、救い主としてお生まれになった方を拝みました。そして、帰る道は、来たときと同じ道ではない、ヘロデ王の宮殿を避けて、他の道を通して自分たちの国へ帰って行きました。彼らは幼子イエスさまに出会ってから、本当の王、神さまが下さった救い主の姿は、ヘロデ王のように高級な宮殿やエルサレムの人たちのような物質的な豊かさの中にあるのではない、貧しくても貧しさを恥としないところにこそあることに改めて気づかされたのではないのでしょうか。

博士たちは他の道を通して自分たち

の国へ帰っていきました。ところが、もう一人の博士がいました。このもう一人の博士は聖書には登場しない人物です。彼の名はアルタバン。彼は、救い主のお生まれを知らせる星を見て他の仲間たちと一緒にイスラエルの国へ旅をする約束をします。それで、イエスさまにお会いしたら捧げようと三つの宝を持って出かけます。ところが、約束した場所へ行く途中、彼は道端に瀕死状態で倒れている人に出会います。しかし、この人と関わっていたら約束の時間には間に合わないことを、彼は知っていました。少しばかり悩んだ末、彼はそのまま放っておいたらきっと死んでしまうだろうと、彼を助けます。そのために、イエスさまに捧げようと持ってきた宝うちの一つを売り払いました。

仲間たちとの約束を守ることができなかったアルタバンは、一人でお生まれになった救い主を訪ねることにしました。そして、数日後やっとベツレヘムへたどり着いたとき、イエスさまご一行はもうエジプトの方に逃げてから間もないときでした。イエスさまにお会いすることができなかったのです。できなかったばかりか、そのときは、ヘロデ王によって、ベツレヘムの二歳以下の子どもを殺す命令が出されているときでした。彼が立っているところを、血まみれになった剣を持ったヘロデの兵士たちが、次から次へと子どもたちを殺して回ります。そのとき、アルタバンの前に子どもを胸に隠して逃げている一人の母親が助けを求めてきました。「この子が殺されないようにどうかお助けください!」。彼はこの母親の願いを無視することができませんでした。アルタバンは懐から残った二つのうちの一つの宝を取り出し、剣をもって今に

でも子どもを刺そうとしている兵士に渡します。それで、この親子は兵士の目から見逃されたことになり、いのちを救うことができました。

イエスさまに捧げようとして持ち出かけた宝は後一つしか残りませんでした。けれど、アルタバンは自分の国へ帰ることなく、イエスさまの家族のあとを追ってエジプトに行き、その後旅の途中で社会の皆から追いやられ、一つの村で暮らすしかなかった重い皮膚病を患う人たちの村でお世話をしながら長い歳月を暮らします。そして、三十三年を過ごし、人生の晩年にその村の人たちより「夢を実現するように！」と勧められ、その村を離れます。そして、エルサレムへ戻りました。髪の毛もあごのひげももう白くなったおじいさんです。

ある日、エルサレムは大騒ぎです。逾越しの祭りのことでもあります。二人の強盗が十字架刑にされることと、そしてもう一人のナザレのイエスという人が強盗たちと一緒に十字架刑にされるという噂で、町中は興奮状態です。アルタバンは、「ナザレのイエス」という名前を聞いてびっくりしました。自分が一生涯をかけて探していた救い主の名前だったからです。自分が死ぬ前に、やっと救い主に出会うことができたと思い、自分の懐から残った一つの宝を出して、その宝で救い主を十字架刑から見逃してもらって、救い主のいのちが助けられるかもしれないと思いました。そう思いながらアルタバンがゴルゴタの丘へ行こうとしたそのときです。一人の女性が助けを求めてきました。父親の商売が倒産して、借金を背負うようになり、その

ため自分は奴隷として売られていってしまおう、だから売られないように助けてくださいと、女性はアルタバンに切に願うのです。彼はそのとき思いました。なんと自分は不運な者なのだろう。救い主を助けようとしていた最後の宝まで、救い主のために奉げることができない。自分は何のために救い主を捜し求めてここまで来たのだろう。自分の人生は無駄な人生だったと嘆きました。アルタバンは最後の宝で女性を助け、そして、挫折して、その場に座り込んでしまいました。そのときです。どこからか声が聞こえました。

「アルタバン、ありがとう。あなたはわたしが飢えているときに食べさせ、のどが渴いていたときの飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた。ありがとう。」と言うのです。

すると、アルタバンは答えました。

「いつわたしが飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ、のどが渴いておられるのを見て飲み物を差し上げたのでしょうか。いつ、旅をしておられるのをみて宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたのでしょうか。いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたのでしょうか。」

すると、その声は、「このもっとも小さい者一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのだ」と言うのでした。

アルタバンは、イエスさまの声を聞きながら、十字架の上でイエスさまが息絶えてなくなられたときに起きた地震のゆれで落ちてきた瓦で頭を打って亡くなっていきます。

アルタバンの一生涯の歩みを振り返ってみますとき、一面、そこまでして捜し求めなくたって…という思いもありましょう。しかし、彼は、救い主に会いたい、わたしの宝を救い主のために捧げたい、という一念で生きていたからこそ、自分と出会わされたもっとも小さき人、いのちを危うくされている人たちとともに生きることができたのではないのでしょうか。実は、彼自身は、自分にある宝を直接救い主に捧げたがった、けれど、神さまは、救い主に捧げることは、困っている隣人とともに生きることであると、それこそ、まことの捧げものなのだと、この話を通して教えているのではないのでしょうか。

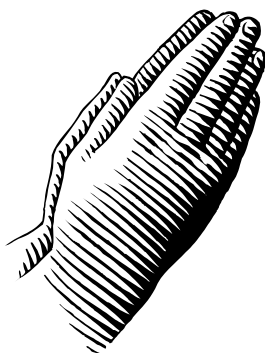
今日の福音書の中に実際に描かれている博士たちも、救い主に出会ってから帰る道を変えたということ。ヘロデ王の宮殿を通らない道、エルサレムといった大都会、豊かな道を通らない他の道から帰っていったということ。ヘロデの王宮やエルサレムの豊かさの中にはないもの、そこは、その道は、貧しい道かもしれません。だけど、その貧しき道にこそ自分たちがともに生きるべき隣人がいる、そして救い主もそこにこそおられるということ。博士たちに

知らされたことはこのようなことではないでしょうか。

ヘロデ王とエルサレムの住民が抱かざるを得なかった不安は、この世の宝を権力を、名誉を、富を自分だけのものにしようとするところにありました。つまり、ともに生きる隣人を見出すことのない歩みだったから。子どもを殺されて嘆く親の悲しみがどれだけ辛いものなのか分からない、剣に思いを託して生きることを誇りとする王に不安は付きまとうものでありましょう。富の豊かさの中に、奴隷となって売られていく者の苦しみが分かるはずがない、富を救い主として信じる人には、救い主のお生まれは不安でしかなかったということです。

わたしたちは、この新しい一年もいろいろの人に出会うことでしょう。

この新しい年には、わたしの前の、わたしの隣の、貧しくされ、小さくされている一人と積極的に関わる中でともに生きる一年でありたいです。わたしの宝を差し出して歩む、そのような一年でありたいと思います。



**聖書のみことば****イザヤ 42 章 1ー7 節**

見よ、わたしの僕、わたしが支える者を。 わたしが選び、喜び迎える者を。彼の上にわたしの霊は置かれ、彼は国々の裁きを導き出す。 彼は叫ばず、呼ばわらず、声を巷に響かせない。傷ついた葦を折ることなく、暗くなってゆく灯心を消すことなく、裁きを導き出して、確かなものとする。暗くなることも、傷つき果てることもない、この地に裁きを置くときまでは。島々は彼の教えを待ち望む。主である神はこう言われる。神は天を創造して、これを広げ、地とそこに生ずるものを繰り広げ、その上に住む人々に息を与え、そこを歩く者に霊を与えられる。主であるわたしは、恵みをもってあなたを呼びあなたの手を取った。民の契約、諸国の光として、あなたを形づくり、あなたを立てた。見ることのできない目を開き、捕らわれ人をその枷から、闇に住む人をその牢獄から救い出すために。

**使徒 10 章 34ー38 節**

そこで、ペトロは口を開きこう言った。「神は人を分け隔てなさないことが、よく分かりました。どんな国の人でも、神を畏れて正しいことを行う人は、神に受け入れられるのです。神がイエス・キリストによって・・・この方こそ、すべての人の主です・・・平和を告げ知らせ、イスラエルの子らに送ってくださった御言葉を、あなたがたはご存じでしょう。ヨハネが洗礼を宣べ伝えた後に、ガリラヤから始まってユダヤ全土に起きた出来事です。つまり、ナザレのイエスのことです。神は、聖霊と力によってこの方を油注がれた者となさいました。イエスは、方々を巡り歩いて人々を助け、悪魔に苦しめられている人たちをすべていやされたのですが、それは、神が御一緒だったからです。

**ルカによる福音書 3 章 15ー22 節**

民衆はメシアを待ち望んでいて、ヨハネについて、もしかしたら彼がメシアではないかと、皆心の中で考えていた。そこで、ヨハネは皆に向かって言った。「わたしはあなたたちに水で洗礼を授けるが、わたしよりも優れた方が来られる。わたしは、その方の履物のひもを解く値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」ヨハネは、ほかにもさまざまな勧めをして、民衆に福音を告げ知らせた。ところで、領主ヘロデは、自分の兄弟の妻ヘロディアとのことについて、また、自分の行ったあらゆる悪事について、ヨハネに責められたので、ヨハネを牢に閉じ込めた。こうしてヘロデは、それまでの悪事にもう一つの悪事を加えた。

民衆が皆洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて祈っておられると、天が開け、聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た。すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。

# 説 教

## 『神の御心を生きる方』

「見よ、わたしの僕、わたしが支える者を。わたしが選び、喜び迎える者を。彼の上にわたしの霊は置かれ、彼は国々の裁きを導き出す。彼は叫ばず、呼ばわらず、声を <sup>ちまた</sup> 巷に響かせない。傷ついた葦を折ることなく、暗くなってゆく灯心を消すことなく、裁きを導き出して、確かなものとする。暗くなることも、傷つき果てることもない、この地に裁きを置くときまでは。島々は彼の教えを待ち望む」（イザヤ 42 章 1～4 節）。

これは、先ほど聞きました旧約聖書の日課イザヤ書ですが、今日、イザヤ書は私たちに一人の神の僕を紹介しています。この神の僕は、「傷ついた葦を折ることなく」、「暗くなってゆく灯火を消すこと」のない人。そして、この人、イザヤが示している神の僕が、今日、ヨハネが授けている洗礼を受けるために民衆たちの間に並んでおられます。

ヨハネがヨルダン川沿いで洗礼を授けている、その列を並んでいる民衆とは、洗礼を受けるに相應しくない人たちでした。つまり、今日の福音書の箇所少し前の方に書いてあるところをみていますと、「マムシの子らよ」と呼ばれながら「差し迫った神の怒りを免れると、誰が教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。」と、叱られた人々のことです。なのに、洗礼を受ける資格など持っていない民衆たちの只中にこの方、神の僕がともに並んでおられるのです。イエス・キリスト。どうして、

イエスさまがこの民衆たちとともに並び、この民衆たちと同じく怒りを受けながら、洗礼を受けようとしておられるのでしょうか。罪のない方がまるで罪ある者のように、ともに並び、洗礼に相應しい実を結ぶようにと叱られているのです。

さて、民衆たちは洗礼を授けているヨハネのことをメシアではないだろうか、心の中で密かに思っていました。しかし、ヨハネは強く群衆の密かな思いを否定し、来るべきメシア像を紹介します。

「その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。そして、手に箕を持って脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉にいれ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」と。

このヨハネの言葉の中に示されているメシア像はとても怖いイメージです。麦と殻をわけて、麦は倉に入れ、殻は消えることのない火で焼き払われると言い表すメシア像であるからです。けれど、イザヤが紹介する神が遣わす僕とは「傷ついた葦を折ることなく」、「暗くなってゆく灯火を消すことなく」と語り、「傷ついた葦」が傷つき果てないように、「暗くなってゆく灯火」が消されてしまわないように、最後の裁きの日まで守り続ける方、この方がメシアであると言うのに、箕をもって脱穀場をきれいにし、麦は蔵に入れ、殻は消えない火で焼き払われる裁き主としてのメシアが来るべきメシアであるとヨハネは紹介しています。イザヤとヨハネが描くメシア

像には大きなギャップがあり、正反対の姿をしているメシアですが、どうしてでしょうか。

ヨハネから「マムシの子」と呼ばれている人たち。この人たちに来るべきメシアが紹介されました。今「マムシの子ら」と呼ばれている人たちは、つまり「脱穀場」で「麦」ではなく「穀」に属し、「永遠に消えることのない火で焼き払われる」べき人のことであるということになりましょう。そして、この人は、特別な罪を犯している人のことを指しているわけではありません。普通の人です。わたしたちと同じ人です。つまり、ヨハネが前に並んでいる人たちに向けられている叱りは、すなわち私たち自身に向けられている叱りであるということなのです。今ヨハネの前に洗礼を受けるために並んでいる列は、私たちの列、私も皆さんもこの列の中に並んでいるということ。本当の意味で悔い改めることも出来ず、悔い改めに相応しい実を結ぶことなどなおできないわたしが、ですから洗礼を受ける資格などないのに、しかし洗礼の列に並ぶものとして招かれているということ。

もちろん、私たちの中には実際に洗礼を受けている方が多いでしょう。今さら資格がないといわれてもしょうがないと思っていられっしやる方もおられるかもしれませんが、そうではなく、私たちが洗礼を受けているとしても、それは、私たちが本当に悔い改めにふさわしい実を結んだから洗礼に授かったのでしょうか。そうではないのです。そして、ここで語っていることは学びのことではありません。洗礼の準備の勉強をしてきたか、してこなかったか、主イエス・キリストをわたしの主とし

て告白したかしなかったか、それらを問題にしているわけではありません。私たちがどれだけ徹底的に洗礼の準備をし、キリスト教教理を学び、聖書を暗記し、主イエス・キリストをわたしの主として告白したとしても、本来、わたし自身は、脱穀場で裁かれるべき存在でしかなかった。そんな自分でしかなかったということ。本当は「マムシの子」として、つまり救われない、捨てられた、裁かれて当たり前の、消えない火の中に投げ込まれて焼き払われるべき、そんな存在でしかなかったのに、しかし、救われた者として、脱穀場に連れて行かなくても良い者とされたということ。

今日、「マムシの子ら」が並んでいる列をご覧ください。誰がそこに一緒に並んでおられるか。罪のない方が、わざわざ罪ある者たちの群れに加わり、ですから罪あるものが受ける洗礼を受けるために罪人の群れと主イエスがともに並んでおられるのです。イエスさまが、この列の中にもともに並んでおられるということとは、自ら「マムシの子」になって、神さまの裁きを身代わりとなって受けてくださるということなのです。「マムシの子ら」が何も良いことをしているからではなく、悔い改めることさえもできないのに、自ら罪人の群れに並び、罪人である私たちのためにご自分のいのちを十字架の上で投げ出してくださるのでした。ですから私たちは生きることになったということ。主が、イエスさまが私たちの代わりに神の怒りを受けてくださったから、「マムシの子」でありながらも永遠のいのちを所有した、天の国の資格をもって生きる者とされたのです。いいえ、神さまが、私たちを救うためにご自分の怒りを受ける、愛する子を私た

ちの中に送ってくださったのでした。裁きが送られるはずなのに愛が送られた。これが、私たちに向けられた神さまの愛です。親の愛です。傷ついた葦を折ることなく、暗くなってゆく灯火を消すことのない方の愛なのです。

新しい年を迎えて二週目ですが、新しい年を迎えている喜びもありますが、しかし、年を重ねる度に体が衰えていく、あっちこっち機能的に衰えていくと感じれば感じるほど、明日を迎えることが不安になります。不安は人の心を病ませ、心の光を消し、闇を育ててしまいます。それは、心の中の問題だけではなく、人々との関係の中においても悩み、傷つけられ、ゆるすことができなくて憎しみを持ったまま眠れない夜を迎えてしまったり…

今日、イザヤが語っている言葉、「傷ついた葦」や「暗くなってゆく灯火」とは、このような私たちの内面や人間関係から生まれてくる様々な形の傷などを指しているのです。老いまたは病のゆえの不安や恐れ、または、人間関係の中からくる憎しみやねたみのゆえに心が闇に覆われ、正しく物事を判断する力を失っているとき、そのとき、人は一人でまっすぐに立ち、まっすぐに道を歩むことを妨げられます。自分が自分らしくいられなく、自分の中に恐れというものが大きく場をとり、自分を飲み込もうと脅迫してくる…このような私たちの内面にある闇に、恐れることなく立ち向かってくださるのは、ただ一人主イエス・キリストのみです。この方が、私たちの病を担って、憎しみや不安を担ってくださる方。ご自分のいのちを危うくされながらも、わたしが生きられるように支えてく

ださる方なのです。この方のゆえに、私たちは不安や闇の力から解き放たれて生きる自由が与えられているのです。自由な、ゆるされたものとして生きることがゆるされているということ。

神さまは、愛の神であるがゆえに、裁きを救いへと、赦しへと変えてくださいました。たった一人、イエスさまだけを犠牲にすることによって、みなが生きられるように、愛の業を示してくださったのです。これが洗礼を施すことの意味なのです。この世に生きる私たちの教会は、教会の群れである私たちは、このような神の愛を受け継ぐ群れであるがために、この愛を示す必要があります。それが使命なのです。教会が洗礼を施すということは、教会の群れがこの愛を実践していきることを宣言する行為の一つなのです。

つまり、イエスさまが、神の裁きに差し迫られているわたしのために死んでくださったように、わたしもわたしの隣の一人のために死ぬということ。傷ついているわたしの隣人が生きるためにはわたしが隣人が負っている傷を癒すための関わりをするしかないので。小さくされて、抑圧を受けて、自分らしく生きることが妨げられている人が、喜びを持って自分らしく生きられるように、私たちの教会がこの世で与えられている使命を果たして生きたいのです。

ヨハネの手紙 4:7～このように書いてあります。

「愛する者たち、互いに愛し合いましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。8

愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。9 神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。10 わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。11 愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。12 いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互

いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内です。13 神はわたしたちに、御自分の霊を分け与えてくださいました。このことから、わたしたちが神の内にとどまり、神もわたしたちの内にとどまってくださることが分かります。」（1ヨハネの手紙4:7-14）。

ヨハネの手紙は続けてこう語ります。「愛には恐れがない。完全な愛は恐れを締め出します。」と。

## 【礼拝予定】

### 【主日礼拝】 毎週日曜日 朝 10 時 30 分～

|                                                                                                            |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 2月4日(日) 顕現節第5主日<br>聖書：エレミヤ 17:5-8・1コリント 12:27-13:13・ルカ 6:17-26<br>主 題：主にある幸い 讃美歌 56(教会)/320(教会)/294(教団)    |
| 2月11日(日) 顕現節第6主日<br>聖書：創世記 35:3-15・1コリント 14:12-20・ルカ 6:27-36<br>主 題：神の愛に生かされる 讃美歌 181(教会)/365(教会)/389(教会)/ |
| 2月18日(日) 変容主日<br>聖書：申命記 34:1-12・2コリント 4:1-16・ルカ 9:28-36<br>主 題：栄光の主 讃美歌：60(教会) 148(教会)/175(教会)/            |
| 2月25日(日) 四旬節第1主日<br>聖書：申命記 26:5-11・ローマ 10:8b-13・ルカ 4:1-13<br>主 題：荒れ野の誘惑に勝利する主 讃美歌 66(教会)/460(教会)/450(教会)   |

(説教主題は今のところの予定です。変更になる場合もあります。)

### 【その他の集会】

毎週水曜夜7時より礼拝を行っています。日曜日の日課と同じものであるため別枠での予定は乗せないことになりました。日曜日の礼拝に出られなかった方々のための礼拝ですので、どうぞどなたでもご参加ください。

第三日曜日12時30分～聖書をやさしく学ぶ会。2月は第二週。

4月より、女性の視点から聖書を学ぶ会が金曜日午後3時より始まります。

随時(希望にあわせて)キリスト教入門講座・面談など行なわれています。